

「我らの使命はご承知のとおり。信仰が冷えた日に、神と不死への信が衰えていく日に、我らは来て人々に示す、人間が不死であることを、人は神の火花である魂を内に秘めるものであることを。

我らは人々に過去の誤りを教えたい、生命が進歩であることを伝えたい、人々の目を向上と成長の未来へと向けさせたいのである」

「これにより人々は、愛と慈悲と憐れみと人への奉仕、さらには神への崇敬、これを全生命とする霊達の存在を知るに至るのである」

訳者序

現代は人類に対する、神の新しい啓示の時代に入っています。世間では、これをアクエリアス(水がめ座)期に人類は入りつつあるとも言います。それはそう言うこともできます。二千五百年前以来の釈迦、中国の諸子百家、ギリシャの哲人達、なかなしくイエスにわたる、偉大な神の啓示時代を人類はもちました。現代はそれを上まわる、さらに偉大な新啓示時代に人類は遭遇しています。それは基本において、人智の進歩、特に教育の大衆化によって、その器に应じてさらに大きな霊的真理の啓示が可能になったことです。また、科学技術の発達で、物質文明の発展に比し、精神文明がなおざりにされ、このままでは地球も人類も破壊されてしまう危機を、人類が作り出してしまったことです。

今かつてない人類に対する神の啓示運動が展開されています。その一つの大きな潮流がスピリチュアリズムの発生と展開です。これらの運動を通じて、人類はおそらく二十一世紀以降は、霊文明時代へ向けて、意外に急速な方向転換を遂げていくように思われます。すなわち、新しいアクエリアス時代の展開です。

新しい靈的眞理が体系的にスピリチュアリズムを通じて、この百数十年間に伝えられてきました。これは数少ない優れた靈能者を通じての、神靈界からの靈界通信を通じてであります。その世界の三大通信とも言うべきものは、年代の早い順に、アラン・カーデックの『靈の書』、ステイントン・モーゼスの『靈訓』、およびモーリス・バーバネルの『シルバー・バーチの靈言』であります。これらは年代を異にし、受信者こそ違え、その源は同じ神、すなわち現代の神靈界からの同じ新啓示運動の一環であります。

右はいずれも邦訳されています。ステイントン・モーゼスの『靈訓』は、すでに早く昭和十二年に浅野和三郎氏の名訳で出版されました。しかしその後永く絶版のまま待望久しい書でしたが、近年幸いにして潮文社より復刻出版されました。これに続いて近藤千雄氏がこれの全訳の労作を発表しています。すなわち、浅野氏の『靈訓』は抄訳であったわけです。ただし、これは特筆すべき名訳であること、また、キリスト教徒ではない一般の日本人向きに、人類普遍の靈的眞理の靈示の部分を主体に訳出してあることです。つまり、受信者のモーゼスはイギリス国教系のキリスト教の牧師で、その頭にはその教義信条がこびりついていました。新しい啓示のためにはこのドグマを一掃しなければ、純正の靈的眞理は通信できません。したがって、通信靈団とモーゼスとの間に、多年にわたり、この間

の反発とそれに対する教導が行われました。モーゼスは最後にはドグマの誤りを悟つてこれを捨て、純正な靈的真理の、つまり真正のスピリチュアリストとなります。近藤氏の全訳には、この間のキリスト教関連の問答や経緯までを含めて訳出してあるわけです。

モーゼスの受けた靈示は自動書記による通信が主で、それはノート二十四冊に及ぶ膨大なものです。右の『靈訓』はそのほんの一部分です。しかし、その中に珠玉の近代の啓示が光を放っています。

本書の『続・靈訓』は、右の自動書記通信の一部追加と、靈言による靈示、およびモーゼス個人の論説の一部が加えられています。本旨は『靈訓』と同じものですが、幾つかの注目すべき点があります。神命を受けた四十九名の通信靈団の構成が詳細に述べられています。キリストの再臨（メシア、またはマイトレーヤー降臨などとも世間で言われます）の真相について、各所で言及されています。これと深いかわりのあるスピリチュアリズムの発生、これがやはり神靈界の計画に基づいていたことを示す靈示が幾つもあります。また、靈的現象には邪靈の働きが極めて多いことを、繰り返し警告しています。これは、昨今のオカルト・ブームに便乗して、新新宗教の跳梁やら、いいかげんな心霊書の氾濫に対する、傾聴すべき警告であります。

読者が、幸いにして、いま胎動している新啓示運動の鼓動を感じとっていただければ、また、その運動が人類にいったい何を求めているのか、その問いを持つていただければ、訳者はモーゼスと共に、またインペレーターを初め四十九名の霊団の方々と共に、望外の喜びとするものです。

訳者